

松尾神社の不思議

健軍3丁目の小高い丘陵地に松尾神社は建っている。石造りの鳥居をくぐって急な石段を4・50段ばかり登ると社殿がある。社殿は昭和60年に建て替えられたとあり、新しく立派である。境内には社務所・公民館の看板が二つながら掛けてある建物があり、氏子の人たちの集会場であることがわかる。あとは御影石に刻まれた由緒書きと改築祈念碑及び簡易なお水舎が建っているだけで、神社の経歴を示すような灯笼類、祈念碑類等は一物もない。由緒書きには次のように記されている。



松尾神社 昭和60年改築 2010年3月撮影

大化年間（西暦645年）当地に鎮座。

果実や樹根の類を以て、飲料を醸造する事は、熟れの国でも早くより考え出されたもので、我国においても古くより行われているものでありますが、さらに進んでこれを米・麦・豆等の穀類に適用して、所謂穀醸の法を創始せられた大神は、即ち、わが松尾神社の御祭神大山咋命・市杵島媛命であります。

社伝によると、松尾大神は産業の開発に力を致され、先ず山城丹波地方の山野を拓き、民に耕耘の業を教え、盛んに農事を奨励せられ、これにより収穫し得た五穀選み取り、これを御山の水を以て種々試醸せられ、漸く今日世に伝わる処の醸造法の基礎を作られたのであります。故に古来、醸造の祖神として、又産業守護の大神として、篤き尊崇を受けられている次第であります。

（京都府右京区 松尾山鎮座松尾大社々記）

昭和60年9月吉日 責任総代者名 外氏子一同

松尾神社の不思議 1 創建はいつか

「大化年間当地に鎮座」と由緒書にあるけれど、大化年間とは大化の改新の大化である。考古学上の時代区分にしたがえばこの時代は古墳時代後期に属するのであって、大和朝廷の統治はまだ未成熟で国造（くにのみやっこ）・県主（あがたぬし）というような地方の豪族が統治した時代である。そんな古い時代の創建とは、とても信じられない。と言って、創建時期を示す文献資料はないのだから、これを否定することもできない。

熊本最古の地誌『国郡一統誌（寛文年間刊）』には託麻郡のところに「松尾大明神」と社名のみ記載されて、由緒等の記載はない。饒舌な叙述で知られるあの『肥後国志（明和年間）』には社名の記載すらない。江戸時代の「手永手鑑」にも健軍神社の記載はあっても、松尾神社の記載はない。これは江戸期の識者たちが持て余した神社であったことを物

語っているのではないか。

さらに時代が下って明治の神社明細書に至ってはじめて簡単ではあるが説明がある。

「熊本県管下肥後国健軍村字上山下六千七拾壺番 村社 松尾神社」

とあり、由緒のところに次のように記されている。

「大化年間ノ勸請トハ謂伝来レトモ年月等明瞭ナラス旧来健軍神社恒例ノ祭祀夏越年越ノ両度当社ニ神幸アリ其路次ニ棚幣振坂トテ今ニ其名ヲ存ス斯ヲ以創立勸請往古ノ久遠ナル可見」(社掌定員一名 明治二九年二月認可)

ここでは由緒について、醸造の神・産業の神について一言も触れず、健軍神社から祭祀のとき神主が来ること、その通り道を棚幣振坂という、これだけの記載である。しかし、この記述は微妙なところに触れている。「斯ヲ以創立勸請ノ久遠ナル」という叙述は格下の神社が格上の神社に報告参上する神事とも読めるからである。そうすると松尾神社の格式は健軍神社より上位ということになり、もしそうなら、江戸時代の文書になぜ登場しないのか、という疑問を呈する。不思議な神社である。

さらに氏子戸数三九戸とあり、これは意外に少ない。村社といいながら、氏子はその字の住人に限られたのだろうか。

松尾神社の不思議 2 なぜここに醸造の神なのか

良い米が採れ・清澄な水があって醸造業が興っておれば、その守り神として醸造の神を勸請することがあるかもしれない。しかし、この地に醸造業は興らなかった。江戸期を通して竹宮村にそのような条件はなかったのだ。

この地は水田がすくなく、主要産物は麦・粟・大豆・小豆・菜種等畑作物であった。ただ、水だけは豊富な湧水に恵まれていたが、それだけでは材料不足であろう。醸造などというのは産物に余剰があってはじめて成り立つ産業である。この地にそんな余剰はなかった。それどころか、不作に悩まされる年の方が多く、百姓は年貢が払えず田畑、家畜、家屋敷だけでなく己の身とともに家族まで質入れしたという記録さえのこっている。〔享和元年(1801)の「町在」参照〕

松尾神社の不思議 3 なぜ松尾神社なのか

京都の松尾神社は帰化人秦氏の氏神である。秦氏の秦は秦の始皇帝の秦である。紀元前3世紀に秦は漢に亡ぼされるが、そのとき乱を遁れて生き残った一族があった。それが秦氏の祖先だという。秦氏は何世紀もかけて朝鮮半島に秦韓という国を建てたが、北方に勃興した新羅の圧迫のために国を保つことができず、ついに第二の故郷も捨て日本列島へ遁れてきた。その時期は応神天皇(3世紀後半)のころというから、気が遠くなるほどの昔である。けれども、これは単なる言い伝えでなく、考古学的裏打ちをもった歴史の事実として認められている。

その人数は一万数千人になるというから、これは集団というより民族移動と言った方が当たっている。許されて山城・丹波地方に居住を認められたらしい。そのときから、日本における秦氏の活動が始まる。秦氏は農耕・養蚕・醸造・機織り等において最新技術を身につけていただけでなく、始皇帝は万里の長城を築くなど土木技術に長けていたから、そ

ういう技術も受け継いでいただろうし、原野の開墾などは秦氏の得意中の得意であった。秦氏は次第に富みを蓄え、その経済力をもって大和朝廷の重要な廷臣となるまでに勢力を拡大した。聖徳太子に仕えた秦川勝は有名である。

以上が秦氏の簡単な素描であるが、その秦氏の神社がどうして健軍の地に存在するのか、創建の時期、その担い手がなぜ判らないのか、こういうことが、私の好奇心を刺激するのである。

大胆な仮説

私はおもう。秦氏が朝鮮から日本へ遁れてきたときの上陸地は九州のどこかの港であった。これは朝鮮から日本へ渡航する際、島伝いの航海であれば必然的にそうなる。そして一度に全員というのではなく、少しずつ長期間にわたってというのが、こういう場合の常識であろう。また、応神天皇に会いに行ったのは主力集団ではあったが、全員ではなかった。任意に分散した小集団が当然あった。その小集団の一つが東へ向かわず、南下してここ健軍へてきたとすればどうであろう。ここは託麻原洪積台地が熊本平野に接する崖端部に、江津湖という湧水湖があり、その湖畔の湿地帯は小規模の稲作に好都合な土地もあった。このあたりは縄文遺跡、弥生遺跡だけでなく奈良時代までの竪穴住居跡が集中的に出土するところであり、それだけ条件の良いところであった。彼らは先住民と折り合いをつけ、ここに割り込ませてもらった。その際彼らの持っている農業技術・土木技術はおおいに役立つことだろう。彼らはここに安住の地を得ただけでなく、次第にこの地で指導的部族に成長し大化のころには自らの氏神を建立するまでになっていた。山城で成功を収めた同胞とも連絡をとり往来もしたであろう。

京都の松尾神社をこの地へ勧請したのは彼らではないだろうか。そう考えるとはじめに挙げた疑問が解けるのである。醸造という目的で勧請したと考える必要はないということ。いつ頃誰がという疑問も解ける。大化年間のころ、秦氏の子孫によつてとなる、秦氏が秦氏の神社を建てるのだからなんの不都合もない。大化という年代の古さも納得できる。

大化と云えば彼らが日本の土を初めて踏んでから400年ばかり経ってる。自分たちの氏神を建立するまでに、そのくらいの時間がかかったということであろう。ここで注意したいのは健軍の松尾神社の創建と京都の本社創建との時間のずれがさほどにないということである。ほぼ同時期といって差し支えないほどである。ということは山城と同じ程度の文明レベルがここにも存在していたとも言えるが、同時に氏神建立の気運が全国的に高まっていたということもあったのではないか。

秦氏は一万数千人からの出発であったが、混血を繰り返すうちに秦人としての形質・特徴を失い完全に日本人に同化してしまった。しかし、微弱ながらも秦氏の血を受け継いでいる家系には、ときどき先祖帰りをして日本人離れした骨格顔貌を生み出すことがあるかもしれない。秦族は漢民族とは大いにことなり、シルクロードの民らしく紅毛碧眼であったという。

